

タガ 日本の縮の緩みの考察

金沢工業大学客員教授
(株)人間と科学の研究所 所長

飛岡 健

—日本人は、もっと日本文化の拡がりと奥行きを本質的に学び、
日本に自信を持ち、世界と渡りあおう!—

はじめに

(1)から(4)において、日本文化の基底の形成に関して、村落での定着生活の下での水田稻作農業生活がそのベースとして機能していた事を明らかにしてきた。今回はもう少し、今日の日本文化の基底の形成の上に乗った幾つかの本質的事柄に触れておきたい。

その一つは「禅」の導入であり、もう一つは「武士道」の形成である。この両者はその内容においても、形成の過程においても、基底深い内的関連を有している。そして明治維新の西洋科学技術文明の導入と第一次大戦後のアメリカ的生活様式である。果たして、どこまで日本文化の基底を変化せしめているのであろうか?

禅の導入

坐禅が日本に入ってきたのは、鎌倉時代と言われるが、それにはその

時代に入る前から、その導入を欲する社会環境が存在していたと考えられるのが妥当であろう。明らかに平安時代の末期に、『平家・源氏』の武

士階級の支配する時代が登場し、そして鎌倉時代に入り、完全に武士階級が支配する時代に入った。その当時の貴族階級、あるいは一般庶民の精神的悩みは一体どのようであったか?そして、その解決の為に、どのような思想があり、どのようにその役割を果たしたのであろうか?それ

をまず考えてみよう。

時代的には、平安時代(794~1192)は大きく分けて、3期に分けられる。

1192(後醍醐天皇)は、鎌倉時代(1192~1333)と呼ばれる時代に、3期に分けられる。

平安時代には、外への権力を求めるよりも、内向きに自己の完成に向かうエネルギーを強める傾向が強まっていた。そこでは何よりも、こうした精神の動きを支える芸術、文学や宗教が求められることになる。その一つとして禅宗

の激しい攻め合いで生じ、各々が自警団的組織を持ち、それらが世襲化し、何代か続く内に「武家」という家柄が社会的に定着し、徐々に一つの独立勢力となつていった。

そしてそこには藤原家以外は、出世出来ない貴族社会の抑圧された構図と、武士社会の形成という二つの大きな社会的勢力の葛藤、軋轢とそこでの悩みを救済する策とが強く求められる状況があった。同時に多くの内紛や戦いは、多くの農民達をはじめ一般の人々にも、心の静けさを求めるものと考えられる。

明らかに貴族達は心の安寧には、この平安期の中期から末期にかけ、社会は大きく乱れ、莊園貴族間の争いが頻発する。他方武士階級の方も、徐々に死んでいった。この平安期の中期から末期にかけ、社会は大きく乱れ、莊園貴族間の争いが頻発する。他方武士階級の方も、徐々に死んでいった。

一 平安京と天皇親政 .. 桓武天皇
II 摂関家と国風文化 .. 藤原道長
III 院政の武士(源平) .. 平清盛 源頼朝 家頼

を社会的に感じる展開を迎える。主従との関係、あるいは一族への忠誠等々、自らの心を静かな状態にするべく、あるいは死に対する心構えを鍛錬していく上で、宗教の助けが必要とされた。そうした状況に巧みに人々の心を捉えたのが『禅宗』であつたと言えよう。

その『禅宗』の内容について少し触れてみよう。

師衆に示した如く
「善知識は何をか名付けて坐禅するや、比の法門中は無障無碍なり、
外に一切の善惡の境界において、心念が起ころざるを名付けて、座をなし、
内に自性を見て乱れざるを禅となす。
外に相を離れれば禅となし、内に乱れざるを定となす。
外に苦しき相著すれば、内に心即ち乱れ、
外にもし相を離れれば、心即ち動かず、本性は自淨、自定なり

『六祖壇經』
坐禪第五

そして、元々禅は中国において生まれ、6世紀前半に達磨が中国に伝来、6世紀前半に達磨が中国に伝

禅宗：座禅をする宗派

全ての人には、内面には仏性があり、それを再発見する為に修行を行うインドで始まった禅を、6世紀の前半に、達磨が中国へ伝えて発展。日本では、鎌倉時代の初期に栄西、道元、江戸時代に陰元が伝え、発展

臨済宗	曹洞宗	黄檗宗
栄西禅師	永平寺の道元禅師 総持寺の蛍山禅師	陰元禅師 京都 萬福寺
お祖師様の言葉、行状 『公案』	『保証一如 只管打座』 (悟りと修行は同一のもの)	浄土は西方に在るのではなく、自分の中に在る
看話禅 公案を考えながら座る	黙照禅 心を無にして黙々と座る	念佛禅 禅と浄土思想の合致
通路(対面)の方を向いて座る	壁の方を向いて座る	
建仁寺派 南禅寺派 妙心寺派 仏通寺派(広島) その他十四派	永平寺 總持寺 二つの大本山 約一万五千ヶ寺 僧侶 二万人 一千万檀信徒	普茶料理、煎茶等の文化 木魚は黄檗宗と共に普及

座：外に一切の善惡の境界において、心念

の起ころざるを名付けて座と成す

禅：外に相を離れれば禅と成す

定：内に自性を見て乱れざるを定と成す

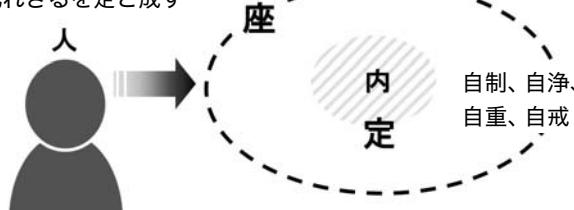


図1 坐禪定の定義

え発展し、更に日本に入ってきた。特に、臨済宗、栄西の伝えた禅宗は、「公案」を主体とし、道元の伝えた曹洞宗では『保証一如 只管打座』を唱え、壁に向かって座禅修行をする。どちらかがと言えば、公家(權力を持つ者)には臨済宗が、武家に

は曹洞宗が好まれたようである。

坐禅という言葉の定義は、前述の如くであるが、少し図示してみると、

図1のようになる。

いずれにしても、他者との関係から離れて、心静かに自分の心を置き

たいとい

う。

二、二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

武士道の発達

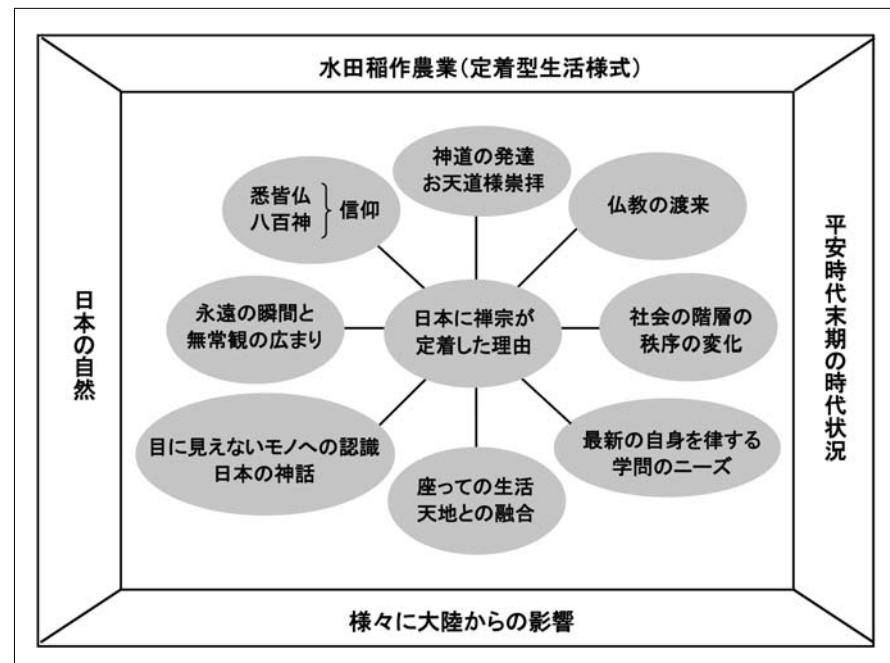
戸時代に確立したイメージが強い。しかし平安時代に誕生した「武家」、あるいは「武士階級」には、公家や一

今日の「武士道」という言葉は江戸時代に萌芽として出来ていた筈である。何よりも「武士」という存在は、常に生命を賭した戦いと密接不可分

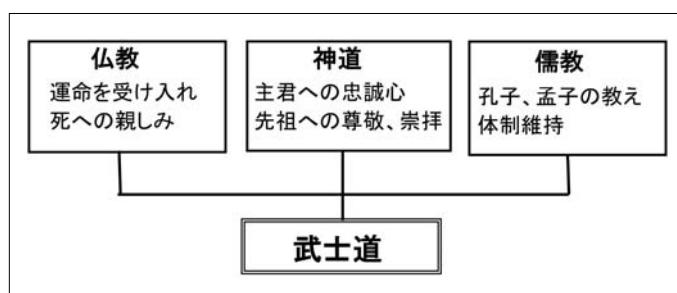
般大衆とは異なる思想、あるいは考え方方が未分化であれ、何らかの原始的な形であれ、徐々に原型的なものが萌芽として出来ていた筈である。

戸時代に求められたに違いないのである。戸時代の武士達レベルに確立しなくとも、原初的な武士にとっての「道」が求められたに違いないのである。

教が入ってきたのは江戸時代に近い道、儒教の教えと関係している。儒



七つの『武士道』の内容：道徳	
義	人としての道 義を通す 安心の掟
勇	義を貫く勇気「匹夫の勇」と「大勇」
仁	人としての思いやり 他者への憐みの心
礼	他者への気持ち（やさしさ）を尊重から生まれる謙虚な心
誠	言ったことを成す「武士に二言はなし」（武士にとって、嘘やごまかしは臆病な行為）
名誉	自分に恥じない高潔な生き方を守る 羞恥心
忠義	武士最大の徳目 主君、組織、国家、個人、家族への奉仕、最高の名誉



時代である。この観点からも今日誇る『武士道』は江戸時代に入つてから形成と言わねばならない。何よりも先祖への尊敬、崇拝は家を守る事でもあり、同時に天皇を守り、天皇を守る公家、武家を守る事でもあつた。まさに主君への忠義であり、その為に自分が恥じない生き方を心掛けた。その為に、常に『正義』、『大義』を求め、自らの生命をかける事に搖らぐことなく、かつ人を慈しみ、尊敬する為に自らが礼を尽くすべく従者となり、「武士に二言はない」の如く『誠』を尽くしたのであつた。

こうした考え方は、鎌倉時代から完璧に出来上がつた訳では無い事は『武士道』についての専門書を見れば明らかである。

武士を“もののふ”との呼称するが、これは当時の建国統一に物部氏は朝廷へ「武」を持つて使える事に由来があると言われている

しかし少なくとも平安時代の中頃以降に徐々に自警團から、一つの階級に特化して武家になつていく過程の中で徐々に、『原初的武士道』が

形成されつづあつた事は疑いが無い。

ここでは、これ以上詳しく「禅」、「武士道」について触れるつもりはないが、日本文化の基底について考える時、定着型の水田稻作農業の中で培われたベースに、そうしたもののが加えられて、今日の文化総体を形成していく事は明らかである。明

らかに鈴木大拙師の『禅と日本文化』においても、日本人が心の安寧を求める中で、『無心』になり、大宇宙（マクロコスモス）の諸々の活動がミクロコスモスとして自分と共に鳴を

し、そこに主客の分離が統合され、

何らかの安らぎが訪れる事を示して

おり、「まさに空をして、空を空の如く顧せず」という概念を伝えている。

こうした神體の部分に、日本の自

然の持つ陰影、明暗のコントラスト、

実際に多種多様な線や形状、そして

様々な気象や、季節折々の山川、草

木の生命の躍動が、日本人の脳裡に

捕捉され、実に豊饒な言葉を、そし

て「日本人の美意識、自然観、哲学、

思想、情趣」を生み出し、奥深い文

学、芸術を創作せしめたのである。

実際日本文化の多くは、当初、日

影響を極めて強く受けていた。既に

述べたように日本文化は、木村尚三

郎氏が指摘し、当研究所が詳細に調べ、裏打ちしたように「男時・女時」の「交互到来」が観察されている。即ち、

男時には、海外から様々なモノを導

入し、それを女時で日本的なモノへ改

良、発酵させていくパターンである。

明らかに鎌倉時代までは、アジア大陸からのモノが主体であり、仏教、儒教もそうであり、様々な政治、経済形態や建築、芸術等もそうであった。

しかし注目すべきは、明治以前ま

では多くのモノを「男時」に輸入し

たが、それを日本的に改良、発酵さ

せる「女時」の期間が「男時」よりも長かった事と、それらをより良い

モノにするアイディアと技術とが日本社会に事前に培われていた事を正

しく捉えておかねばならない。例え

ば製鉄の技術であった。

より良い鉄を生産出来る国が未

だ、昔も今も「鉄器文明」の地球に

おいては優秀なモノを生み出す「一つの

重要なポイントなのである。いずれ

にしても、禅も武士道も、定着型の

水田稻作農業の中で、培われた人々

の心の上に生まれたのであつた。

